



第 130 回 ビスマルク体制の完成

1 統一ドイツの国内政策

- ・() 中の 1871 年、プロイセンを中心に、ヴェルサイユ宮殿でドイツ帝国が成立した。



宰相ビスマルク
19 世紀最大の政治家。国際体制に、個人の名前がついていることが凄い。

☆ドイツ帝国 (1871~1918 年)

- ◆ () (在位 1871~1888 年)
- ・男性普通選挙で選ばれた帝国議会の権限は弱く、州の代表である連邦参議院の議長を兼ねた宰相 () の独裁であった。
- ・中央党などに代表される南ドイツや、国内のポーランド人などカトリック勢力と対立し、これを抑圧する政策をとった。これを () という。
- ・1870 年代の大不況の中で、1879 年には産業資本家とユンカーからの支持を獲得するため、() を制定した (鉄と穀物の同盟)。

<ビスマルクの社会政策>

- ・ドイツの社会主義運動は、1860 年代にラサールの指導で始まった。
→1875 年、ベーベルの指導で () が結成された。
→1878 年、皇帝狙撃事件をきっかけに、() を制定した。
- ・疾病保険、災害保険、養老保険など社会政策を充実させ、労働者の支持も集めた。



文化闘争の風刺画

ビスマルクと、カトリックの象徴ローマ教皇が、チェスで駆け引きをしている。プロイセンなど北ドイツにはルター派が多く、バイエルンなど南ドイツにはカトリックが多かった。



皇帝狙撃事件

2度にわたり皇帝ヴィルヘルム1世が狙撃されるという事件は、法律制定のきっかけとなった。だがこの狙撃事件は、実際のところ社会主義者とは無関係であった。

2 ビスマルク体制の開始

- ・ビスマルクは、ヨーロッパの複雑な外交を巧みにあやつり、建国されたばかりのドイツの安全を確保することに努力し、() を形成した。

<ビスマルク体制の基本政策>

- ・ドイツは建国時に () と () を奪うなど、フランスの恨みをかっていた。
→ () を一番の基本政策とした。
- ・また建国されたばかりのドイツが戦争に巻き込まれることを恐れ、ヨーロッパの平和と安定を目指した。

B ビスマルク体制(1871年)



3 三帝同盟とベルリン条約

• 1873年、ドイツ・オーストリア・ロシアの間で（ ）が結ばれた。
→しかしロシアとオーストリアは、クリミア戦争以降に（ ）
をめぐって対立しており、最初から足並みはそろっていなかった。

• 1878年、ロシア=トルコ戦争後に結ばれた（ ）の内容が原因
で、ロシアはイギリス・オーストリアと対立し、戦争寸前となった。
→ビスマルクは、（ ）を開いて戦争を回避させた。
→しかし会議の結果、ドイツとロシアの関係が微妙となり三帝同盟も解消した。

• ロシアは、バルカン半島をあきらめ、中央アジアや中国での南下政策を強化した。
→インドや中国に権益を持つ（ ）や、朝鮮半島を狙う（ ）
との対立が強まった。

→ロシアは再びドイツに接近して、1881年、三帝同盟が復活した（新三帝同盟）。



ベルリン会議(1878年)

この会議の背景と結果については、第129回のプリントを見よう。ビスマルクは、イギリスとの関係を良くするため、あえてロシアに対して厳しい姿勢をとった。



東シベリア総督ムラヴィヨフ

ロシアの軍人ムラヴィヨフは、1860年にウラジヴォストクを建設して東アジアの拠点とした。ここは151回のプリントを勉強しよう。



シベリア鉄道の建設

1880年、ロシアはシベリア鉄道の建設計画をはじめた。これはアジアにおいて南下政策を進めることを意味したが、資金不足で工事はなかなか始まらなかった。

4 三国同盟とビスマルク体制の完成

• 1881年、フランスは北アフリカの（ ）を保護国とした。
→同じくチュニジアを狙っていた（ ）との対立が起こった。

• ビスマルクはイタリアを誘い、1882年、ドイツ・イタリア・オーストリアの間で、（ ）が結ばれた。
※ただしオーストリアとイタリアの間には、（ ）問題があった。

• またロシアとオーストリアの関係がどうしても改善せず、1887年に新三帝同盟が解消すると、同年ドイツとロシアは（ ）を結んだ。